

無料

ご自由にお持ち
帰り下さい

平和で豊かな沖縄県を目指す情報誌

沖縄協会だより

2020.12

No.18



平和の絵―「戦争と平和」

20点連作―第15作

西村計雄 作

イザイホウ 久高島の神事

300号

176×303×6.5cm



〈制作意図〉 琉球発祥の地といわれる久高島には、沖縄の代表的な古代神事のひとつ、イザイホウの秘祭がある。6日間に亘って繰り広げられるこの祭りは、12年毎の午年に行われ、30歳から70歳までの島の全女性が参加する。海の彼方ニライ・カナイ(楽土)から訪れる神を迎えて祝福を受け、神と島びとたちが交わる。大木の間を縫って白馬に乗った神が、彼方の世界から音をたてて降りてきたと伝えられている。祭りのハイライトである三日目の「花さし遊び」は、神アシャギの神域で、新しくナンチュ(神女)になった人たち(30歳～41歳)が、神女になった印しの赤と白の紙で造ったイザイ花を髪にさし、円陣をつくりエーファイ、エーファイの掛声をひびかせ、神遊びを展開する。そこには美しい感動の世界がある。対角の曲線で分つ左上が天上界と右下が地上界。その一体となった神域の神と人との出会いと感動を表現した。

西村計雄(明治42年・北海道生まれ)

東京美術学校卒、藤島武二に師事。1943年文展(現・日展)特選。戦後早稲田中学校と高等学校の教師を勤め、51年に42歳で単身渡仏する。ピカソの画商カーンワイラー氏との出会いを契機に、53年よりパリを中心にヨーロッパ各地で個展を開催。その作品は、フランス国立近代美術館やパリ市美術館に買い上げとなった。フランス芸術文化勲章、共和町立西村計雄記念美術館開館。

2000年12月4日没。

沖縄協会は、沖縄が本土に復帰するまでの間、各種の援護活動を行った特殊法人南方同胞援護会(昭和31年～47年5月)の後を受けて、昭和47年9月20日に設置された内閣府所管の公益法人です。新たに設立した財団法人沖縄協会は、南方同胞援護会の実績と経験を活用して、沖縄の振興施策に積極的に協力し、平和で豊かな沖縄県の建設に寄与してまいりました。平成23年(2011)4月1日、沖縄協会は内閣総理大臣より公益財団法人として認定を受けて「公益財団法人沖縄協会」として新たな一歩を踏み出しました。これからも、沖縄県の健全な発展と幸福な社会形成に役立つ事業を行いながら、沖縄平和祈念堂を管理運営することで、平和で豊かな沖縄県の建設に貢献していきます。

公益財団法人 沖縄協会

第42回

沖縄研究奨励賞 受賞者決定

沖縄協会では、沖縄の地域振興、学術振興に貢献する人材を発掘し、育成するため、昭和54年(1979年)から沖縄研究奨励賞を設け、沖縄を対象とした将来性豊かな優れた研究(自然科学・人文科学・社会科学)を行っている50才以下の新進研究者又はグループに対し、その年ごとに3件以内に贈呈している。本年度で第42回を重ね、全国5府県から11件の推薦応募が寄せられ、選考委員会(牧野浩隆委員長)において、厳正・慎重な選考を重ねた結果、受賞を3件に決定した。

自然科学

マンゴー病害グループ
澤岷 哲也(代表者)



所属：沖縄県農業研究センター・
病虫管理技術開発班・
上席主任研究員

年齢：46歳

研究題目：沖縄産マンゴーに発生
する炭疽病と軸腐病の
発生生態の解明および
防除技術に関する研究

人文科学

麻生 伸一



所属：沖縄県立芸術大学
全学教育センター・准教授

年齢：39歳

研究題目：近世琉球政治社会史の
研究

社会科学

小原 満春



所属：沖縄県立
那覇商業高等学校
・教諭

年齢：43歳

研究題目：沖縄県における観光経
験とライフスタイル移住
の関係に関する研究

※年齢は2020年7月15日応募時

受賞理由

沖縄県産のマンゴーは、日本の生産を占める高級果樹として市場から高く評価され、パイナップルと並び基幹果樹に成長し、その将来性は沖縄農業を支える大きな潜在力を持っている。沖縄はマンゴーの開花期に雨が多く、気温も低く、気象条件的に見ると、マンゴー栽培には不向きである。その上に、放任すると巨木になる。そのため、本土復帰前には現在のようなハウス栽培は想像を絶するものであった。しかしながら、多くの関係者の努力によって、ハウスによる雨よけ栽培や剪定や誘引による盆栽的な技術や開花期の調整やハウス温度管理によって、着実な成果を上げるようになってきた。同時に、ミバエ類の根絶により、輸入マンゴーに義務付けされている燻蒸処理が不要なため、樹上で完熟させることが可能である。そのため、品質的に海外のマンゴーはとも太刀打ち出来ず、ある意味で絶

沖縄産マンゴーに発生
する炭疽病と軸腐病
の発生生態の解明およ
び防除技術に関する
研究

マンゴー病害グループ
澤岷 哲也(代表者)

対的な有利性を持つている。

当初は、ハウス栽培にすれば降雨による炭疽病や軸腐病の対策が一般的な防除で可能と思われるが、樹齢を重ね5年以上になると、病疫は樹体の深部にまで達し、防除が困難となり、10年以内に廃園となる例も少なくない。マンゴーのハウス化は、農家にとっては多大な投資であり、同時に、規模拡大の不安要素を解決する必要がある。

本研究は、このような難題に対し、剪定や薬剤による効率的な防除策を確立するとともに、炭疽病抵抗性品種を同定し、育種素材として活用できる可能性を明らかにしたものである。本研究の成果は、マンゴー産業の更なる発展はもとより、将来に対し大きく期待できるものであり、独創性も高く、学術的にも極めてレベルの高いものである。

【比嘉照夫 選考委員】

『近世琉球政治社会史』の研究

麻生 伸一

受賞理由

麻生伸一氏の研究は、近世琉球に関する①外交関係、②王権関係、③その他に整理される。①の外交関係では、海難事故、遭難事件、海上治安、救恤体制

など、琉球と中国清朝との関係を追求している。遭難事件で進貢船が民間船かによって清国の対応に差があったことなどを指摘している。また日本との関係では、琉球と日本(薩摩、幕府)との贈与儀礼を取り上げている。琉球から薩摩へ太刀や馬の献上、幕府將軍から薩摩藩主へ、薩摩藩主から国王へ「御鷹の鶴」の下賜儀礼を通して、琉球が幕藩国家の儀礼体系に参画していた意味を考察している。②

の王権に関する研究では、王位継承、先王祭祀等について検討を加えている。首里城内の寝廟での先王の位牌祭祀を巡って、王族の意向に対し、評定所や久米村など家臣団の賛成、反対の意見があり、中国での事例収集、儒者の見解、琉球での先例など踏まえての結論に到る過程を検証している。家臣団と王権の関係性、政策決定方法の考察である。③その他、薩摩入り後の「琉球の武器統制」について、多くの資料を用いて、刀剣の所持は認められており、いわゆる武器制限はなかったと結論づけている。

近年の成果に、編者として参加した「琉球冊封全図」と「火花方日記」の刊行がある。前書は北京の故宮博物院が所蔵するもので、後書は尚家文書である。前書で彩色図版の解説を担当し、後書では、「からくり花火」

師の系譜、来歴、職人編成などについて論じている。資料や蓄積の乏しい分野に取り組んだ研究である。

麻生氏は、この他にも近世琉球史の様々な分野で、精力的かつ意欲的に研究に取り組みしており、今後の活躍を大いに期待するものである。

【田名 真之 選考委員】

『沖縄県における観光経験とライフスタイル移住の関係に関する研究』

小原 満春

受賞理由

観光業は沖縄の基幹産業であり、沖縄の経済社会の健全な発展のために、実証的な観光学研究に基づく政策提言が強く求められている。

小原満春氏は、沖縄を主たる研究対象に観光学研究の業績を積み重ねてきた研究者であり、特に観光経験がライフスタイル移住(理想の生活を求めている自発的移住)の意思決定に与える影響を中心に研究活動を行ってきた。

小原氏の研究の背景には、「地方の衰退」が問題化している今日、それを食い止める自治体の政策形成に貢献できないか

との問題認識がある。「移住者が人口増加の要素」となっていることに着目し、移住意思決定の「要素」が特定できれば「移住推進」を目指す自治体の政策形成に資するとの考えである。

氏は、沖縄に既にライフスタイル移住を行った者やライフスタイル移住を希望している者(潜在的移住者)を対象に、「観光経験」や「観光地関与」がライフスタイル移住の「移住意図」に及ぼす影響を定量的に調査研究し、意思決定プロセスモデルを確立した。「日常生活の不満」が移住への推進要因となり、「仕事・収入の不安」などが移住の阻害要因となることが社会的な実証研究により明らかになった。予想された結論ではあるが、それが実証されたことに意義がある。

この調査結果に基づき氏は、「移住者を募る自治体による仕事や住居などに関する支援」が潜在的移住者の不安を解消し、移住を促進することに効果的であると結論する。一般論としてこの結論は正しい。しかし「仕事がない」からこそ若者が流出し「地方の衰退」が起こるのであり、このままでは自治体に対する処方箋にはならない。必要なのは、ライフスタイル移住者はどのようにして仕事を見つけ、たのか(何を手掛かりに、誰の支援を得て、どんな職種で等

々)の解明ではなかるうか。それは彼らが今までの沖縄ではなかった何かのスキルを持った人々だったからかも知れない。この点の解明は、沖縄の発展のポテンシャルがどこにあるかを示すものとなり極めて重要である。

氏の研究の一層の深化に期待したい。

【櫻井 國俊 選考委員】

『沖縄研究奨励賞への想い』

奨励賞の第1回の受賞者・大城喜信氏は、平成4年に沖縄協会が発行した「沖縄研究奨励賞のあゆみ」の中で次のように述べています。

「沖縄は、地理的、歴史的、文化的、産業的な観点から研究テーマも豊富にあり、解決すべき課題も多い。しかしながら、沖縄では一般に研究開発に対する社会的評価が低く、新しい分野に挑戦する者に対しては比較的冷淡であり、社会的には形が見えるまでは資金的あるいは精神的支援の水準が低い段階にあると私は考えている。したがって、公的・私的研究機関を問わず研究者には厳しい条件が多いので、これを乗り越えるために余分なエネルギーが要求され、能力を十分に発揮しにくい環境であるといえよう。このような沖縄社会の空白部分に大きな光を当てたのが沖縄研究奨励賞であり、多くの研究者に目標を与えている。」

奨励賞は、沖縄の学術文化、地域経済の発展の基盤となる素晴らしい研究者とその研究を顕彰し続けていきます。

★ライオンズクラブ

国際協会3370D地区

前ガバナーによる記念植樹と

沖縄ライオンズクラブの

清掃活動

10月17日、ライオンズクラブ国際協会3370D地区(鹿児島・沖縄)の前地区ガバナー玉城清重氏による記念植樹が沖縄平和祈念堂前庭で行われた。記念植樹の前には、沖縄ライオンズクラブの皆さんによる前庭周辺の清掃活動が行われ、美しい景観が広がった。



★戦の語り部功労者に対する

感謝状贈呈式

10月17日、戦後75年の節目に、戦争を体験し、これまで「語り部」として県内各地で活動された方々に、沖縄県による「戦の語り部功労者に対する感謝状贈呈式」が沖縄平和祈念堂で行われ、参加した18名の方に感謝状が贈呈された。



★沖縄平和祈念像「浄め」

12月16日、当協会は恒例行事の沖縄平和祈念像「浄め」を行った。この浄めは、年末年始にかけて開催する「摩文仁・火と鐘のまつり」と、新年を迎えるにあたり行われるもの。今年は、コロナの影響も鑑み、「浄め」規模を縮小し、漆芸家の糸数政次さんと当協会職員7人での作業となった。戦没者への慰霊の祈りと世界の恒久平和、コロナの終息を願い、平和祈念像の埃を払い浄めた。



協会関係事業他

募集案内など

★第12回琉球大学家政学科

同窓会基金募集案内

生活に関する調査研究および社会活動に対し助成金の交付を行い、地域の生活文化の発展に寄与することを目的に設立された琉球大学家政学科同窓会基金の募集が2021年1月11日から開始される。第12回の応募締切は2021年3月31日。当日消印有効。

※詳細は、公益財団法人沖縄協会のホームページより

★沖縄平和祈念堂

改修工事に伴う

ご寄付のお願い

開堂から41年を迎える沖縄平和祈念堂では、現在、経年劣化による改修工事を頻りに実施しております。今後、さらに工事の必要が考えられますので、多くの皆様に諸経費に対するご寄付を賜りますようお願い申し上げます。

感染防止対策徹底宣言



沖縄平和祈念堂

新型コロナウイルス感染症拡大防止ガイドラインを遵守しています。

沖縄県

沖縄平和祈念堂では、沖縄県が作成した「新型コロナウイルス感染症感染防止対策チェックシート」を実施し、「感染防止徹底対策宣言ステッカー」を取得しています。

久場とよ 作 百合の咲く丘 F100



沖縄平和祈念堂美術館

沖縄出身画家紹介⑦

久場とよ(大正10年生・沖縄県)

大正10年那覇市生まれ。東京女子美術専門学校卒。沖縄タイムス芸術選賞大賞、創元会会員賞、那覇市政功労賞。沖縄女流美術家協会顧問、県展審査員、創元会審査員など歴任。

制作意図

その頃は、きっと、まわりには百合の花が咲いている頃だったと思います。沖縄のてっぽう百合の球根は、戦前かなり重要な農産物の一つで、採集、出荷されると、ちょうど米国で、イースターの頃に間に合って開花したとも聞いております。花売りの女の人の姿は、今もなつかしい那覇の夏の風物詩でした。この大戦で、その産地であった南部は、もっとも過酷な激戦地になりました。永遠の平和を希う想いをこめて、至らない技量もかえりみず、この絵を納めさせていただきます。